

平成 30 年度 全国私立中学高等学校
私立学校特別研修会
外国語（英語）教育改革特別部会
【東日本エリア】
実施報告

一般財団法人日本私学教育研究所・上智大学言語教育研究センター 共催
 日本私立中学高等学校連合会 後援

当研究所では、私立学校においても、外国語(英語)教員の外国語(英語)力・指導力強化を図るためには、教員が 21 世紀型教育に相応しい最新の教授法と情報を早急に取り入れる必要があることから、平成 27 年度より専門家の指導による特別研修《外国語(英語)教育改革特別部会》を実施しており、平成 30 年度も引き続き、専門家の指導に「英語教育推進リーダー中央研修(※)」受講者の実践発表等を加えて、東日本・西日本エリアで研修を実施いたします。

【東日本エリア】では、初日は市川中学校・高等学校を会場に、英語の授業の視察、視察校の教員を交えて意見交換等を行いました。同校はアウトプット活動を豊富に取り入れたアクティブラーニング型の授業に取り組んでおり、多彩な海外研修プログラムも設定され、高水準の英語教育が行われています。

翌日は上智大学・四谷キャンパスにおいて、同大学特別招聘教授・言語教育開発研究センター長・吉田研作氏、同センター教授・副センター長・藤田保氏による講演、文部科学省「英語教育推進リーダー中央研修」受講者による実践発表を行いました。また、参加者の交流を深めてネットワークづくりを進める多彩なプログラムを用意しました。

- ◆ 会 期 ◆ 平成 30 年 5 月 11 日(金)～12 日(土)
- ◆ 会 場 ◆ [市川中学校・高等学校](#) (11 日) 千葉県市川市本北方 2-38-1
[上智大学四谷キャンパス](#) (12 日) 東京都千代田区紀尾井町 7-1
- ◆ 参加人員 ◆ 67 名
- ◆ 参加対象 ◆ 私立中学高等学校の英語科教員
- ◆ 日程概要 ◆

時刻	9 30	10	11 30	12 30	13 45	14 10	15 30	16	17
5月11日(金) 市川中学校 ・高等学校				受付	開 会 式	① 研究授業	施設 見学	② 実践報告	③ 質疑応答・ 意見交換会
5月12日(土) 上智大学 四谷キャンパス		④講演I	休憩 (各自昼食)		⑤講演II	⑥⑦⑧ 実践発表I・II・III		閉 会 式	

- ◆ プログラム ◆
- ①研究授業 市川中学校・高等学校(授業視察・施設見学)
- ②実践報告 テーマ 「アクティブラーニング型授業と国際教育研修」
 報告者 山本 永年 市川中学校・高等学校 教諭
- ③質疑応答・意見交換会 研究授業者との質疑応答、参加者同士の意見・情報交換を行います。
- ④講演 I 演 題 「新しい大学入試とその影響」
 講 師 吉 田 研 作 上智大学特別招聘教授・言語教育研究センター長
- ⑤講演 II 演 題 「新しい時代の英語教育～新学習指導要領の実施に向けて～」
 講 師 藤 田 保 上智大学言語教育研究センター 教授・副センター長
- ⑥実践発表 I テーマ 「生徒の成長(中1から高1まで)」
 発表者 山本 永年 市川中学校・高等学校 教諭
- ⑦実践発表 II テーマ 「実践(組織改革)とその成果 ～横のつながりを作るヒント～」
 発表者 桑 野 健太郎 九州国際大学付属高等学校 教諭
- ⑧実践発表 III テーマ 「アウトプット技能の指導と評価の一体化に向けた取り組み」
 発表者 原 田 貴 之 愛知中学・高等学校 教諭

※小学校・中学校・高等学校等を通じた英語教育改革を進める文部科学省では、平成 26 年度より英語教員の英語力・指導力強化を図る観点から、英語指導力向上事業「英語教育推進リーダー中央研修」を外務専門機関に委託し実施しています。同研修は、全国の国・公・私立学校の英語教員を対象にしているものの、公立学校を中心とした研修の仕組みになっていたことから、私学関係者の要望に応じて、文部科学省は平成 27 年度より私立学校教員が参加しやすいよう受入体制を整備し、私立学校教員も参加できるようになりました。

12:00	受付	正面玄関入口															
12:45	開会式	〔会場：本館4階 視聴覚室〕 司会 川本 芳久 一般財団法人日本私学教育研究所 理事・事務局長															
	1. 開式 2. 主催者挨拶 3. 視察校代表挨拶 4. 日程説明 5. 閉式	一般財団法人日本私学教育研究所 所 長 中川 武夫 市川中学校・高等学校 校 長 宮崎 章 市川中学校・高等学校 教 諭 山本 永年															
13:10	◆研究授業 5限目(13:10~14:00)	(授業は各教室で行います。)															
	<table border="1"> <thead> <tr> <th>学年・クラス・授業名</th> <th>授業者</th> <th>教場</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1年1組 英語</td> <td>藤野 賢治</td> <td>南館2階 1年1組</td> </tr> <tr> <td>中学1年生 帰国生英語</td> <td>Karl James Allen</td> <td>北館4階 第5多目的室</td> </tr> <tr> <td>4年10組 英語表現Ⅰ</td> <td>富永 恵子</td> <td>北館4階 4年10組</td> </tr> <tr> <td>5年1組(理系) コミュニケーション英語Ⅱ</td> <td>山本 永年</td> <td>北館2階 5年1組</td> </tr> </tbody> </table>	学年・クラス・授業名	授業者	教場	1年1組 英語	藤野 賢治	南館2階 1年1組	中学1年生 帰国生英語	Karl James Allen	北館4階 第5多目的室	4年10組 英語表現Ⅰ	富永 恵子	北館4階 4年10組	5年1組(理系) コミュニケーション英語Ⅱ	山本 永年	北館2階 5年1組	
学年・クラス・授業名	授業者	教場															
1年1組 英語	藤野 賢治	南館2階 1年1組															
中学1年生 帰国生英語	Karl James Allen	北館4階 第5多目的室															
4年10組 英語表現Ⅰ	富永 恵子	北館4階 4年10組															
5年1組(理系) コミュニケーション英語Ⅱ	山本 永年	北館2階 5年1組															
14:10	6限目(14:10~15:00)																
	<table border="1"> <thead> <tr> <th>学年・クラス・授業名</th> <th>授業者</th> <th>教場</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>2年7組 英語</td> <td>福田 友子</td> <td>南館3階 2年7組</td> </tr> <tr> <td>4年6組 英語表現Ⅰ</td> <td>山田 勝幸</td> <td>北館4階 第5多目的室</td> </tr> <tr> <td>4年6組 英語表現Ⅰ</td> <td>Samuel Flens</td> <td>北館4階 4年6組</td> </tr> <tr> <td>5年6組(選抜) コミュニケーション英語Ⅱ</td> <td>山本 永年</td> <td>北館2階 5年6組</td> </tr> </tbody> </table>	学年・クラス・授業名	授業者	教場	2年7組 英語	福田 友子	南館3階 2年7組	4年6組 英語表現Ⅰ	山田 勝幸	北館4階 第5多目的室	4年6組 英語表現Ⅰ	Samuel Flens	北館4階 4年6組	5年6組(選抜) コミュニケーション英語Ⅱ	山本 永年	北館2階 5年6組	
学年・クラス・授業名	授業者	教場															
2年7組 英語	福田 友子	南館3階 2年7組															
4年6組 英語表現Ⅰ	山田 勝幸	北館4階 第5多目的室															
4年6組 英語表現Ⅰ	Samuel Flens	北館4階 4年6組															
5年6組(選抜) コミュニケーション英語Ⅱ	山本 永年	北館2階 5年6組															
15:00	◆施設見学 蔵書12万冊を誇る図書館(第三教育センター)やアクティブラーニング対応の教室等、魅力溢れる校内を見学いただけます。																
15:30	◆実践報告	〔会場：本館4階 視聴覚室〕 司会 浜野 能男・外国語(英語)教育改革特別委員 テーマ 「アクティブラーニング型授業と国際教育研修」 報告者 山本 永年 市川中学校・高等学校 教諭															
16:00	◆質疑応答・意見交換会 研究授業を受けての質疑応答の後、グループに分かれて意見交換を行います。 1. 質疑応答(16:00~16:30) 司会 山崎 吉朗 一般財団法人日本私学教育研究所 主任研究員 2. 意見交換会(16:30~17:00) ファシリテーター 外国語(英語)教育改革特別委員、山崎 吉朗・主任研究員	〔会場：本館4階 視聴覚室〕															
17:00	解散																

●5月12日(土)

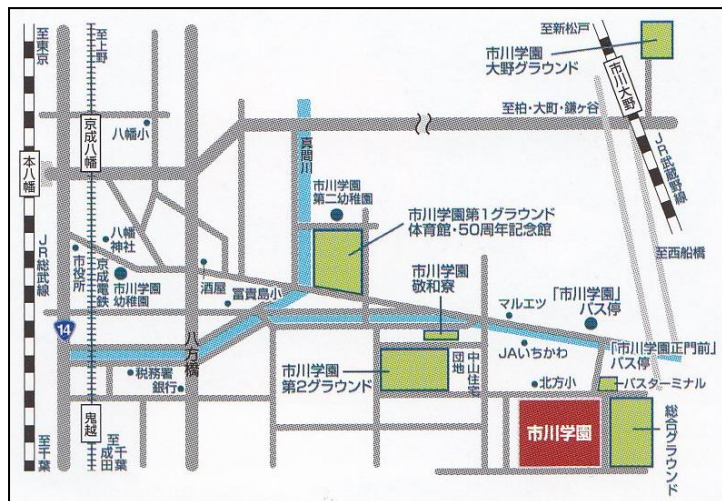
【会場：上智大学四谷キャンパス2号館17階1702会議室】

10:00	◆講演Ⅰ 演題 「新しい大学入試とその影響」 講師 吉田 研作 上智大学特別招聘教授・言語教育研究センター長 司会 浜野 能男・外国語(英語)教育改革特別委員
11:30	◆休憩 ※各自昼食をお取り下さい。
12:30	◆講演Ⅱ 演題 「新しい時代の英語教育～新学習指導要領の実施に向けて～」 講師 藤田 保 上智大学言語教育研究センター 教授・副センター長 司会 伊藤 佳貴・外国語(英語)教育改革特別委員
14:00	◆実践発表Ⅰ テーマ 「生徒の成長(中1から高1まで)」 発表者 山本 永年 市川中学校・高等学校 教諭 司会 田中 歩・外国語(英語)教育改革特別委員
14:30	◆実践発表Ⅱ テーマ 「実践(組織改革)とその成果～横のつながりを作るヒント～」 発表者 桑野 健太郎 九州国際大学附属高等学校 教諭
15:00	◆実践発表Ⅲ テーマ 「アウトプット技能の指導と評価の一体化に向けた取り組み」 発表者 原田 貴之 愛知中学・高等学校 教諭
15:30	◇質疑応答 ※実践発表者との質疑応答を行います。
15:50	◆閉会式 1. 開式 2. 総括 3. 閉式 司会 川本 芳久 一般財団法人日本私学教育研究所 理事・事務局長 一般財団法人日本私学教育研究所 主任研究員 山崎 吉朗
16:00	解 散

◆ 会場案内 ◆

市川中学校・高等学校

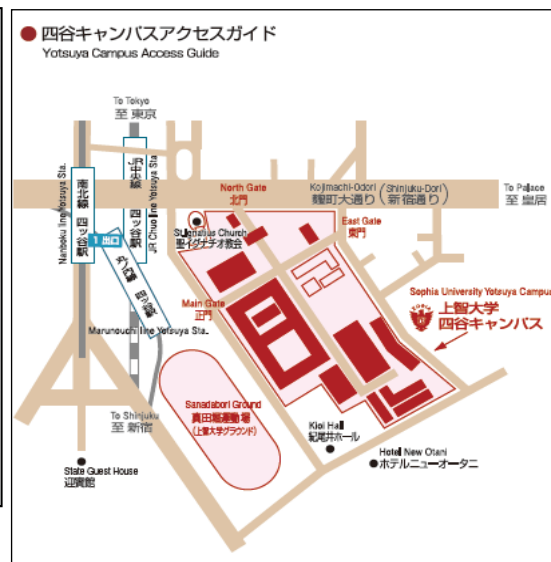
【JR・本八幡駅からバスにて11分。「市川学園」下車】
※医療センター入口行・市川学園行・動植物園行・市川営業所行



上智大学四谷キャンパス

【JR・東京メトロ四ツ谷駅より徒歩5分】

(土曜日北門は閉鎖されているため**正門**よりお入り下さい)



◆ 学校紹介 ◆

市川中学校・高等学校 (理事長・学園長 古賀正一／校長 宮崎 章)

1937 (昭和 12) 年創立。男女共学の中高一貫校。各分野の識者による土曜講座、古今東西の哲学を学ぶ「市川アカデミア」など特色ある講座を数多く開くとともに、2011 (平成 23) 年より文部科学省事業 SSH スーパーサイエンスハイスクールに指定されており、独自の設定科目「市川サイエンス」で高校 2 年次の理系の生徒が課題探究に取り組んでいる。同校は近年、建学の精神を基にしつつ、それを新しい時代に即応した形にするため、進学力を含めた真の「学力」、古今東西の知に立脚した「教養力」、論理的思考と課題探究ができる「科学力」、グローバル社会に対応できる「国際力」、徳を重んじ実践を伴った「人間力」の 5 つの力をまとめた広義の「リベラルアーツ教育」を目指し、不断の改革を進めている。

◆ 講師プロフィール ◆

吉田研作氏

上智大学特別招聘教授、言語教育研究センター長。上智大学大学院、アメリカ・ミシガン大学大学院修了。専門は、応用言語学。J-SHINE 会長。文部科学省「英語教育の在り方に関する有識者会議」座長、「外国語能力の向上に関する検討会」座長、「外国語教育における『CAN-DO リスト』の形での学習到達目標・設定に関する検討会議」座長、「英語力評価及び入学者選抜における英語の資格・検定試験の活用促進に関する連絡協議会」委員・「同協議会作業部会」主査などを歴任。今年からは「高大接続システム改革会議」委員、中央教育審議会「教育課程企画特別部会」委員などを務めている。近年では、日中韓 3 カ国の高校生の英語力比較や、教師の教授法比較などについての研究にも力を入れている。「起きてから寝るまで英語表現 700」シリーズや「小学校英語指導プラン完全ガイド」(ともにアルク)などの監修を務めるほか、著書多数。

藤田 保氏

上智大学外国語学部比較文化学科(現、国際教養学部)卒業。同大学院外国語学研究科言語学専攻博士前期課程修了。専門は応用言語学(バイリンガリズム)と外国語教育。立教大学異文化コミュニケーション学部教授等を経て、現在、上智大学言語教育研究センター教授、副センター長。特定非営利活動法人小学校英語指導者認定協議会(J-SHINE)理事。公益財団法人日本英語検定協会理事。主な著書に『コミュニケーションな英語教育を考える』、『英語教師のためのワークブック』(ともにアルク)、『21 年度から取り組む小学校英語』(教育開発研究所)などがある。

◆ 講師・発表者・指導員(順不同) ◆

吉田 研作	上智大学 特別招聘教授・言語教育研究センター長
藤田 保	上智大学 言語教育研究センター 教授・副センター長
山本 永年	市川中学校・高等学校 教諭
桑野 健太郎	九州国際大学付属高等学校 教諭
原田 貴之	愛知中学・高等学校 教諭
中川 武夫	蒲田女子高等学校 顧問

◆ 特別委員・指導員(順不同) ◆

平方 邦行	工学院大学附属中学・高等学校 校長
山本 永年	市川中学校・高等学校 教諭
浜野 能男	普連土学園中学・高等学校 教頭
田中 歩	工学院大学附属中学・高等学校 教諭
伊藤 佳貴	大同大学大同高等学校 教諭
川本 芳久	一般財団法人日本私学教育研究所 事務局長
山崎 吉朗	一般財団法人日本私学教育研究所 主任研究員

私立学校特別研修会

外国語(英語)教育改革特別部会【東日本エリア】

実施概要

平成 30 年 5 月 11 日・12 日、当研究所と上智大学言語教育研究センターの共催により、市川中学校・高等学校及び上智大学四谷キャンパスを会場に開催した。全国の英語教員等 67 名が参加。

初日は市川中学校・高等学校にて開会式を行った後、研究授業を視察し、蔵書 12 万冊を誇る図書館（第三教育センター）やアクティブラーニング対応教室等の施設を見学した。続いて山本永年・同校教諭からの実践報告、研究授業を行った先生方との質疑応答の後、全体で意見・情報交換を行った。2 日目は上智大学四谷キャンパスにて吉田研作・上智大学特別招聘教授・言語教育研究センター長による講演、藤田保・同センター教授・副センター長による講演に続き、文部科学省事業「英語教育推進リーダー中央研修」受講者 3 名による実践発表が行われた。

大学入試改革や学習指導要領の改訂等を受け、参加者の関心は非常に高く、熱意溢れる講師・指導員・視察校関係者の協力により充実した研修会となった。

●5 月 11 日（金）

開会式

初日は市川中学校・高等学校にて開催。開会式では中川武夫・当研究所所長と、視察校を代表して宮崎章・市川中学校・高等学校校長が挨拶。

中川武夫・当研究所所長は、全国から集まった参加者及び視察校である市川中学校・高等学校への感謝を述べ、次のように挨拶した。「変化する時代に対応するイノベーション人材を育てるため、教育改革が進んでいる。しかし、自らが今どこにいるのか、どこを目指すのかわからないまま、経験と勘で進んでいる部分もあるのではないかと。研修会では、新しい指導法を学ぶことも大切だが、それ以上に学校を離れ客観的に自校を見つめ直すことも大切だ。是非自らの位置を確かめるということも視野に入れて参加して頂けると幸いです」



中川武夫・当研究所所長

続いて、宮崎章・市川中学校・高等学校校長も参加者に感謝を述べ、以下のように挨拶した。「本校は生徒数約 2300 名、生徒の海外や英語への関心も非常に高い。本日は日常的に行っている授業の様子を公開する。忌憚ないご意見を頂ければ、本校の教員にとっても充実した研修になるだろう。英語だけではなく、リベラルアーツやアクティブラーニングなど様々な取り組みを見て頂ければと思う。参加者の先生方にとっても何か得るところがあれば嬉しい。充実した研修会になることを祈念している」



宮崎章・市川中学校・高等学校校長

研究授業・施設見学

5、6時限目に中学1年、2年、高校1年、2年、計8つのクラスで英語の授業を視察した後、校内の施設を自由に見学した。

どのクラスでも生徒達が積極的に発言し、生き生きと授業に取り組む姿が印象的であった。タブレットやプロジェクター等のICT機器を使用した授業が多く、参加者からは「生徒たちが主体的に生き生きと活動するしかけが溢れており、大変参考になった」「それぞれの先生方の工夫に非常に感銘を受けた。早速自分の授業にも取り入れたい」「ICTを用いた授業も大変参考になった。各教室にプロジェクターやスクリーンがあり素直にうらやましかった」等多くの反響が寄せられた。また校内施設も非常に充実しており、特に第三教育センター（図書館）は参加者の関心を集めていた。



グループで課題に取り組む様子



タブレットを使用した授業



12万冊の蔵書を誇る第三教育センター（図書館）



図書館内の学習スペース

実践報告【山本永年氏】

市川中学校・高等学校の山本永年教諭より『アクティブラーニング型授業と国際教育研修』と題して発表が行われた。同校の沿革と教育理念、リベラルアーツ教育、国際交流活動、英語科におけるアクティブラーニング型授業などについて紹介された。

① 市川学園の教育理念

市川学園は、2017年度に創立80年を迎えた伝統ある私立学校で、イギリスのパブリックスクールをモデルとしている。現在は、リベラルアーツ教育に力を入れている。

建学の精神として次の三つの言葉を掲げ、その実践に取り組んでいる。

- ・**独自無双の人間観**・・・人間は誰もが素晴らしい個性と持ち味をもち、かけがえのない存在である。この価値観を教育の基盤として捉えている。
- ・**一人ひとりをよく見る教育**・・・人は誰も、他と比べることのできない独自無双の美しさがある。

それを春の七草の一つである「なずな」に喩えて、「なずな教育」と呼んでいる。

- ・ **第三教育**・・・教育の中心舞台となる家庭教育と学校教育に加えて、自分で自身を教育する「第三教育」の実践に力を注いでいる。リベラルアーツ教育の実践に代表されるように、生徒一人ひとりの個性に応じて、良いところを存分に伸ばせるような教育実践を尊重している。

②リベラルアーツ教育

同校が実践するリベラルアーツ教育では、文系や理系などの枠組みにとらわれることなく、様々なジャンルの教養を学びながら、「思考力」「判断力」「表現力」の育成に取り組んでいる。具体的には、「学力」「科学力」「人間力」「国際力」「教養力」、これら5つの力を養成する場面として、「市川アカデメイア」「土曜講座」「LAゼミ」「SSH」「ボランティア活動」「ユネスコスクールの活動」など様々なプログラムが行われている。

③国際交流活動

同校では、国際交流に関する取り組みとして、同校創立のモデルにもなったイギリス・イートンカレッジでの研修をはじめとして、年間を通じて数多くの国内研修・海外研修を実施している。また、そうした研修の成果として、文化祭では「海外で輝く市学生」と題したプレゼンテーション大会を実施している。さらに、中高生の総合的な教養を競う大会「World Scholar's Cup2017」において、国内大会を突破し世界大会への出場を果たしている。

④アクティブラーニング型の授業実践

同校の英語教育は、CEFRの指標に基づき、B1レベル以上の生徒を増やすことを目指している。その目標に向けて、クラスを2分割した少人数クラスを取り入れて、4技能をバランスよく指導するための環境を整えている。また、オンデマンド教材やスカイプ英会話、デジタル教科書など、ICTも積極的に活用している。

授業以外においても、エンパワーメントプログラムと称した外部講師による英語のプレゼンテーション技術を学ぶ講座や、世界中の大学の授業をオンラインで学ぶことができるMOOCS(ムークス)など、充実した教育プログラムが用意されている。

英語4技能のうち、「書く力」の育成が課題だ。今後は、リベラルアーツ教育における論文の作成や海外研修の報告書作成といった場面において、まとまりのある英文がしっかりと書けるように、アカデミックライティングの指導を充実させていきたい。



質疑応答・意見交換会

5・6限目の研究授業と実践報告について、授業を担当された市川中学校・高等学校の先生方を招き、質疑応答を行った。その後、参加者によるグループでの意見交換が行われた。意見交換では、学校現場で抱えている課題や具体的な授業の手法に関する質問など、英語教育に関して実に様々な議論が交わされた。また、指導員やオブザーバーとして参加した英語教育推進リーダーがグループに加わり、参加者の質問に対して適切なアドバイスを送っていた。限られた時間ではあったが、参加者の積極的な姿勢により、充実した研修内容となった。

Q：研究授業は異なるクラスサイズで行われていた。どのような授業形態があるのか。

A：クラスサイズや授業形態は、科目によって異なる。5時間目のコミュニケーション英語Ⅱ（理系）のようにクラス単位で行う授業もあれば、6限の英語表現Ⅰのようにクラスを2分割して行う授業もある。6限のコミュニケーション英語Ⅱ（選抜）には、帰国生など英語が堪能な生徒も含まれている。

Q：帰国生の入試や入学後の授業について、教えてほしい。

A：帰国生に対しては、12月と1月に中学入試を行っている。英語入試のレベルは高く、海外経験がないと対応できない。また、帰国生のクラスは、ネイティブの教員が5年間指導することになっている。

Q：グループ活動では、4人1組を作って活動していたが、毎回どのようにしてグループを決めるのか。

A：グルーピングは、あまり意図せず行っている。むしろ、活動によってグループ内のメンバーを入れ換えることで、どの子どももコミュニケーションできるようになることを目指している。

Q：英語のプレゼンテーション指導について教えてほしい。

A：普段の授業では、インプットとアウトプットをバランスよく指導することを考えて、授業を行っている。特にアウトプット活動では、自己紹介など基本的な内容から順番に取り上げていくことで、どの生徒もプレゼンテーション活動ができる工夫をしている。学年進行とともに難易度を少しずつ上げながら、また、内容に関しては他の教科との関連性を考慮しながら、扱う項目を決めている。

Q：オンライン英会話の授業について、授業での進め方や導入価格など、具体的に教えて欲しい。

A：オンライン英会話は、1年間で10レッスンを実施している。25分のオンライン授業を中心に、残りの時間は通常の授業準備や復習などに充てている。オンライン英会話の業者はベネッセコーポレーションで、1人当たり1レッスン800円、年間で8,000円である。

Q：（オンライン英会話の質問に続いて）スピーチの評価について教えてほしい。

A：スピーチの評価は、「暗唱」「内容」「アイコンタクト」「抑揚」の4つを観点別に評価している。各項目3点で合計12点。それを100点換算にして算出している。

Q：コミュニケーション主体の授業であったが、教科書自体の進め方はどのようにしているか。

A：実際には、オーソドックスな授業も展開されている。ただし、以前に比べて、読解を中心とした精読の割合は減ってきている。授業の中でできることと外でできることを



精査しながら、必要な活動に取り組んでいる。

Q：授業で iPad を使用していたが、他の授業ではどのように扱っているか。また、辞書はどのように扱っているか。

A：iPad は現在の 4 年生(高校 1 年生)から持たせている。大学入試が新しくなるからという理由ではなく、あくまでもアクティブラーニングの道具として活用している。辞書は紙とタブレットの両方が必要だと思うが、iPad で使えるものに変えつつある。iPad の活用法に関する問い合わせは保護者からもあり、不要なアプリをインストールさせない指導や、クラッシーを活用して日常的に生徒との対話を増やすなど、考えながら活用している。

●5 月 12 日 (土)

講演 I 【吉田研作氏】

2 日目は会場を上智大学四谷キャンパスに移し、初めに吉田研作・上智大学特別招聘教授・言語教育研究センター長が「新しい大学入試とその影響」と題し講演を行った。



吉田研作・上智大学特別招聘教授・言語教育研究センター長

これまでの英語教育改革 (SELHi など) に多少の効果はあったものの、大きな変化は無かった。現在、日本の中学生・高校生の多くが何らかの英語力を身につけたいと思っている一方、仕事で使いたいと思っている生徒は 3 割にとどまる。これは学習者の「自信の無さ」に起因すると考えられ、留学についても同様だ。韓国・中国の学生の多くが留学したいと考えているのに対し、日本の中学生・高校生は積極的ではない。さらに新入社員のグローバル意識調査 (産業能率大学調べ) によると、彼らの多くは日本の企業はグローバル化を進めるべきであると考えているが、海外で働きたいと思う者の割合は減っている。近年は AI によって外国語を学ぶ必要が無くなるかもしれないという予測もあるが、人と人のコミュニケーションは簡単なものではない。したがって、「将来」AI に任せるから学ぶ必要がない、ケータイが翻訳してくれるから「今」学ばなくても良いという考えを持つことに疑問符がつく。

これまでは「知識・技能」を中心とした能力を育成してきたという歴史があるが、これからは「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性等」の部分の育てるべきだ。ここで CAN-DO リストが登場する。これは「知識・技能」のみをリスト化したものであるという見方もあるが、例えばディスカッションをするということは、人との関わり無しには成し得ないものだ。この考え方は他教科へも波及している。すなわち、アクティブラーニングの推進である。

2011 年から実施している小学校 5・6 年生の外国語活動を振り返ると、児童のモチベーション (興味・関心) が育成されている様子がうかがえるほか、音声面の諸技能 (発音・リスニング) の向上も見られる。ただし、小学校と中学校の連携には課題がある。中学 2 年生 2 学期頃から英語が嫌いだという生徒が増加している。その対応として、5・6 年生の内容を 3・4 年生に移動。小学校 5・6 年生では「英語の『素地』を育成する」から「英語の『基礎』を育成する」に変化し、それに伴い中学校は「英語のコミュニケーション能力の『基礎』を育成する」から「英語のコミュニケーション能力を育成する」に変わっている。また「英語の授業を英語で」ということの意味を誤解しないようにする必要がある。必要ならば、日本語を使ってもよいのだ。英語を使うのは生徒であり、

先生が英語を話し続けるということではない。上記改革の成果を適切に測定するために、大学入試にも変化が起きている。中学・高校で Writing や Speaking のスコアが低い一因として、大学入試では測られない技能であることが考えられる。

文部科学省による高校生の英語力に関する目標（英検準2級50%）は達成されていないため、目標を継続しているが、入試改革・授業改革の結果達成は難しくないと考えられる。中学校に比べると、高等学校における授業での英語使用の割合はやや低めである。ただし、英語を使っているといっても何をしているかが問題だ。その実態は Display Questions（知識・技能を試す問い）の割合が高く、Referential Questions（思考力・判断力・表現力を試す問い）の割合が低い。

「コミュニケーション中心の英語授業で入試に対応できるのか」については SELHi を実施していた当時の英語教育の成果に関する資料が役立つ。約40万人のデータを参照しても、どの学力層もコミュニケーション中心の英語授業を受けた生徒の方が、センター試験でも結果を出している。新学習指導要領における4技能（5領域）について、（5領域とは、Reading, Spoken Interaction, Spoken Production, Writing のことであり、CEFR に準拠したもの）小学校・中学校・高等学校のつながりを理解する必要がある。高等学校の先生は中学校の解説を、中学校の先生は小学校の解説を理解する必要がある。また、言語活動は自ずと技能が統合されたものになるはずである。センター試験試行問題には CEFR 評価が記されているので参照に値する。

現実世界で「聞く」ということは単に音だけを聞かせるという意味ではない。自然な環境の中で聞き取れなければならない。また聞いたことを解釈し反応するところまでを含めた「聴解力」を測ることを忘れないでおきたい。「読む」ことも単に文字を読むことのみを指す訳ではない。聞いて理解できるものを、文字で確認するという。絵本（絵がある）など文脈のある中で「読む」ということである。読んだものに反応をすることで、初めて「読『解』」となる。そして、「話すこと」は質問すること、答えることの両方を含む。そのやりとりを継続することで会話が進むことが大切だ。高校英語の「コミュニケーション英語」が「英語コミュニケーション」に変わる意味とは、英語のみに焦点をあてるのではなく、コミュニケーションを成立させることを重視するということだ。スピーチコンテストにも変化が出ており、発表後の interaction も重視するようになった。「書く」ことも何も無いところから書かせるわけではない。peer editing といった協働学習も取り入れられている。

CLIL について、上智大学でも CLIL 重視の授業を展開している。英語を学ぶ際には、「内容」がなくてはならない。4C、すなわち Contents, Communication（生徒間、生徒と先生間）、Cognition, Community（グループワーク）が必須である。

Teacher talk ひとつをとっても3通りの言い方を考えておくことを推奨する。場合によっては身ぶり手ぶりを使っても構わない。コミュニケーションをしようとする中で正確に言えるようになっていく。したがって、小学校における帰納的学習法は中学校・高等学校でも大事にすべきことである。

Language of Learning（知識・文法などの概念を学ぶ）と Language for Learning（思考し、判断し、それを基に相手に伝えるための言語）があるが、これまでの英語教育では前者に重きを置き過ぎていた。

センター試験試行テストの工夫を読み込んでほしい。2技能テストではあるが、大変良くできていると評価できる。センター試験は高校卒業試験のような位置付けである。大学の個別試験は各大学のポリシーに基づいている。私立大学も国公立大学の影響を受け、4技能を測る方向に進んでいくだろう。外部試験は天井効果のあるセンター試験の抱える問題点を解消してくれる可能性もある

(例えば英検準1級相当の英語力を持つ生徒)。TEAP CBT は技能統合型の試験を具現化したものである。

講演Ⅱ【藤田保氏】

午後より、藤田保・上智大学言語教育研究センター教授・副センター長より「新しい時代の英語教育～新学習指導要領の実施に向けて～」と題し、講演が行われた。

本日は①「英語教育改革で何が変わるのか」、②「授業は何をどうすればよいのか」、③「授業の評価はどうすればいいのか」について話していきたい。

①「英語教育改革で何が変わるのか」。これまでの英語の学習は「テストがある、入試がある。それに向けてテスト対策しなきゃ。合格した。英会話でもやろうかな?合格した!ま、いいか」で終わりだった。そして大学を卒業しても英語は使えないというパターンが何年も繰り返されてきた。つまり、身につけたいのは「英語力」ではなく「合格力」だったのだ。この流れを、「英語を学ぶと、英語ができると同時にテスト(入試)もできる」に変えていきたい。



藤田保・上智大学言語教育研究センター教授・副センター長

吉田先生の話の SELHi の例でもあったように、大学の過去問をやらないといけないということではない。きちんと勉強していれば入試にも対応でき、使える英語も身につくはずである。つまり、学校で学んだことが「試験」でも「世間」でも活かされていくのだ。このために学習指導要領はどうなっていくのか。学力の3要素「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」「何を理解しているか」「理解していること・できることをどう使うか」の真ん中に、世の中で活かしていくことができる学力をつけるという目標が据えられるはずである。人との関わりができるようになるという目標は、英語に限らず全教科で取り組むものであり、また短時間では身につかず、小、中、高の長い期間が必要である。

次に小・中・高各段階での指導要領を比較していきたい。英語を「聞くこと」に関しては、小学校3・4年では、「自分のことや身の回りの物を表す語句を聞き取る、挨拶程度の身近で簡単なことに関する表現が理解できる」。5・6年では、「自分のことや身近なことについて、語句、情報を聞き取れる」(「天気予報で晴れだと分かる」程度のこと)となっている。また小学校では絵本の読み聞かせなど「身近で簡単な話の概要がわかる」まで到達すれば良く、中学校では、前提として「ゆっくり話されれば」が取れ、「日常的な話題について、必要な情報、話の概要が分かる」となっている。中学の最終ゴールは、「社会的な話題について要点を捉えられる」こと。そして、学習指導要領の流れを見ると、小学校3・4年の最後の目的をまとめて小学校5・6年に、5・6年の最後の目的を中学の最初1・2番の目標とし中学の2・3番目の目標を高等学校の英語コミュニケーションで最初に引き継いでおり、前の段階の目標を引き継いでいく形で展開している。さらに高校では「必要な情報を聞き取り話し手の意図を把握する」と書かれている。高1では多くの支援、例えば語彙リスト、言語以外の視覚教材などを活用すれば理解できるとあるが、高2では「多くの支援」の「多く」が取れ、高3コミュニケーションⅢでは「支援をほとんど活用しなくても」という流れになっている。カリキュラム展開でこの段階毎の接続を理解していることが大切である。

つまり意図されていることは、小学校から高校までのカリキュラムがバラバラに存在するのではない、漸進的な展開。前の段階のものが次の最初にオーバーラップし、これによって着実に生徒の学力を伸ばしていく。高校の先生は中学で何を学んできたを意識して内容を考える。小学校の先生はこれから先に何を生徒が学ぶのかを意識して教えて行く。これらが新しい学習指導要領を考える上では大切である。

②「授業は何をどうすればよいのか」。使える学力（英語力）をつけるとは、使いながら身につけること。例えば自転車に乗れるようになるためには、乗れるようになったら乗るのではなく、転びながら、怪我をしながら練習して乗れるようになるはずである。実際に使ってみて身につける、帰納的学習が重要だ。英語を体感的に繰り返すことによって使えるようになる。「英語の授業は英語で」とは説明を英語ですることではない。生徒自身が英語を書いたり読んだり話したりする機会を増やすことだ。

では生徒が英語を使うためには何が大事なのだろうか。小学校から高校まで「コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて」という点は共通している。何のためにこの言葉を発するのか、状況・場面を設定するのは大前提。そして、小学校3・4年生では「表現する」つまり「言えればいい」段階から、5・6年生では「情報を整理しながら考えを形成し」となっている。さらに中学では「論理的に表現」となり、高校では「論理的に適切に、場にふさわしいかどうか」まで考えられるようにする。どの段階でも大切なのは目的、場面、状況、つまり context を意識していくことだ。「いつ言うか、どこで言うか、誰に言うか、何のために言うか」という context がないと丸暗記になってしまう。

言語は3つの要素から成り立っている。「形式 (form) : どのような言い方をするか」「意味 (meaning) : 何を伝えるか」「機能(function) : いつ誰とどのような状況で」である。この3つが揃って初めて言語は使えるようになる。よく役に立たない教室英語の例として言われる、“This is an apple.” この例分の形式(form)は、This is+単数名詞。後ろが複数名詞なら“They are”となる。また冠詞は apple という母音の前なので“an”になる、といったこと。意味(meaning)は「リンゴ」を表す。例えば亀のようにカットし皮を剥いたリンゴがあり、一見リンゴと分からないという状況があれば “This is an apple.” という文が意味あるものになる。使いようがないと言われる文でも場合によっては意味が生まれるのである。この function を考えていないと意味のある言語活動は生まれてこない。form, meaning, function の3要素が頭に入って初めて言語は身につく。これまでの教授法の pattern practice などはそれを考えてない。伝統的教授法で、presentation → practice → product と言語材料、表現を提示して練習して生徒が答えるだけでは、function の部分はたいへん小さくなってしまふ。これではいつ使うかが身につかない。この context、文脈の中でのやりとりにおいて重視されるべきなのは「内容」である。内容に注目しながら最終的に正確さが身につくという順序になるべきであって、最初に正確さを意識すると、使う最初でつまづくことになる。自転車の乗り方の理屈を考えているだけではダメで、実際に乗って乗れるようになるのである。

この考えから生徒に目的を達成させ、タスクを果たさせるという考えが出てくる。まず意味に焦点を当てて、学習者が目標言語を用いて、具体的な成果を目指して果たすための課題を設定する。課題は様々だが、Peter Skehan (St Mary's University, Twickenham) によると「意味が最重要であり、コミュニケーション上で解決すべき問題があり、現実社会における類似の活動に何らかの関係があるもの」と定義されている。タスクとしては以下の様なものが考えられる。

- ・情報交換（話し手と聞き手の間に情報量の差、即ちインフォメーションギャップがある場合にそれを埋めるタスク）

- ・ シミュレーション
- ・ アンケート型調査
- ・ クイズ出題型
- ・ プランニング（小規模プロジェクト）

これらのタスクを、認知プロセスという観点から分類するならば、

- ・ 並べ替えや整理、分類
- ・ 比較・照合
- ・ 描写ナレーション
- ・ 交渉と意思決定
- ・ 問題解決のタスク

といった分類が可能である。

また contents、つまり「何について」タスクを行うかに関しては、生徒達が知っていること、学校で学んでいて馴染みがあることを活用するのが、スキーマを活用することができ有効である。知識を知識として眠らせず、教科横断型の学習を目指す。一つの方向として、他教科に英語を入れるのも鍵である。例えば化学ならば、酸素 O は oxygen の O、炭素 C は carbon の C とそれぞれの頭文字であり、英語との関連が分かる。社会科ならば西洋史の先生が英語で書かれた資料、教材を読む。それについて社会の先生が日本語で構わないので話す。学校内でのコンセンサスが必要だが、イメージとまで行かなくてもこのような教科横断は有益である。英語の課題を出す場合も、小学校なら国語、音楽、図画工作など他教科で学習したことを関連づけることはできるのではないか。5 分間、関係代名詞を使った文で話せと言われても話しを続けることはできない。生徒は一日中学校にいるのだから、自分に関係のある contents を探すのは難しいことではない。また、生徒の日常のみならず社会に目を開かせることもポイントである。たとえば Sustainable Development Goals(持続可能な開発目標)といった社会的なテーマも、貧困、飢餓、気候変動など、様々な科目に関連づけられ、入試の論説に出題されるようなテーマでもある。さらに、教科書のレッスンのトピックに関連づけられるテーマはないかと探してみることも有効である。具体的にこれらのトピックを考えるために、周囲の 2~3 人の教員と、他教科、学校行事で関連づけられるトピックはないかとディスカッションしてみるのも有効だ。ネットで材料を探すこともできる。考え得るタスクの例としては以下の様なものがある。

- ・ インフォメーションギャップがある事項に関して、例えば一方が知らない情報がある国に関してプリントの空所を埋めるタスク。
- ・ 写真を提示しながらある状況、事件について実態報告のミニプレゼンテーションを行う。
- ・ 模擬国連
- ・ アンケート調査。例えばジェンダー別の意識の違いなど。
- ・ スキット作成
- ・ 賛成・反対に分かれてのディスカッション。例えばダム工事に反対か賛成かなど。
- ・ クイズ。調べてきた地域、国に関して問うようなもの。
- ・ 小規模プロジェクト 文化祭などの機会を利用し、貧困で苦しむ人々への募金、衣料品の募集など。また、生徒に身の回り、普段の生活で写真を撮らせ、それについて 1~2 分話すフォトコンテストなども考えられる。

小学校の国語で、校庭の植物の写真を撮ってきて俳句を作るといった活動を聞いたことがある。大変クリエイティブなタスクだと感じた。しかし、これらのタスクをさせて成績をどう付けるかという問題があるので、次は評価について話して行きたい。

③「授業の評価はどうすればいいのか」。パフォーマンス型の授業で評価はどうすればいいのか。知識技能は従来型のペーパーテストで判断できるし、定期考査に日常的なことから関して賛成か反対か 50 語で書くといった形式で出題することもできる。パフォーマンス評価の対象としては、ペアワーク、グループワーク、スピーチ、プレゼン、エッセイライティングなどが挙げられる。面接、机間巡視などによる教師の評価もあるが、生徒が、振り返りシート、リアクションペーパー、ポートフォリオなどの形で活動の記録を残すことも可能だ。生徒が自分である程度そういう CAN-DO シートのチェックを正しくできることを前提に、自己評価、生徒間の評価、教員の評価の三角形をイメージして、評価の方法を考えていく。ポートフォリオを時系列で 4～7 月くらいのスパンで見ると、生徒が答案を書けるようになってきているのがわかる。CAN-DO リストの活用も重要な課題と思われる。それぞれの CAN-DO に関して、十分できるのか、ある程度できるのか、まだまだか、自己評価と教員の評価どちらも行っていくのが望ましい。ある条件(condition)を与えたやりとりでは話すことを制限されるが、できるだけその制限が少ない形で発話の機会を与えるのが重要。

高校の学習指導要領では、「話すこと」において、日常的話題について「情報や考えを伝え合うことができる」とあるが、Ⅱでは「情報や会話を詳しく話して」、Ⅲでは「会話を発展させ」が加わり、発展的に能力を高めるようになっている。また、読むための支援に関しては、英語コミュニケーションⅠでは「多くの支援を活用」、Ⅱでは「一定の支援」、Ⅲでは「支援をほとんど活用しなくても」となっている、採点する際、この違いを具体的にどう見て行けばよいか、「辞書を引いている」「先生に分からないと聞く」といったことが具体的な支援の内容となる。その程度によって判断する。

評価において有益なのはルーブリックの活用である。この活用にはまず、尺度の段階は細かくしすぎてはならない。5 段階でも細かすぎるほどである。パフォーマンス評価はそれぞれ主観的に行われても、こういう形にすれば一定の評価ができ、スピーチなどで話し終わるまでに評価することもできている。3～4 人 1 組のグループを作って、英語のスピーチ（発表）の評価をするルーブリックを作成してみたい。ブランクのハンドアウトを渡すので、できれば「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の 3 つの観点から評価するように作成してほしい。具体的な評価ポイントとなるのは、「主体的に学習に取り組む態度」ならば eye contact、受け答えに詰まってしまった場合の対応、「知識・技能」ならば文法の間違いなどである。

（グループ毎の評価表作成作業）

観点として先に何を見るかを定めるのが大切である。今回見たい点と次回見たい点が違って良い。最初は「仮に焦点が変わってきてもとにかく話し続ければよい。」程度でもよい、eye contact ができているかを見るなど、作文ならばトピックセンテンスをサポートする内容になっているかなどにしぼることもできる。観点が多いと見切れなくなる。3～4 点が上限かと思われる。

採点は教員だけでなく生徒もする。甘い・厳しいの個人差は当然あるが、厳しい学生の評価がよい者に低く、良くないものにはさらに低くならば、甘い生徒はよい者には甘く、良くない生徒にも

甘い、良い者と同様なほどには甘くつけない。つまり評価者による差はあっても、良いもの、良くないもの自体は評価者によって逆転はほとんどない。

ではグループの中で1名、「自分の授業で行ってみたいタスク」というタイトル、持ち時間は2分でプレゼンテーションしてほしい。それを他のメンバーが自分たちで作った評価表で評価する。基準を元にコメントも加えて欲しい。

(このアクティビティで講演終了)



アクティビティに取り組む参加者

実践発表 I 【山本永年氏】

講演に続いて実施されたのは、文部科学省事業「英語教育推進リーダー中央研修」平成 27 年度受講者による実践発表。はじめに、「生徒の成長（中 1 から高 1 まで）」と題し山本永年・市川中学校・高等学校教諭より発表があった。

発表は、英語教育推進リーダー中央研修を受講する前から現在までの授業風景を記録した映像を上映しながら行われた。

当時の授業の形はコミュニケーション主体となっているものの、教師が話し過ぎで、生徒の活動量は今よりもずいぶん少なかったように思う。英語教育推進リーダー中央研修を通して「生徒中心の授業」の重要性に気づいた。そうした授業実践へと切り替えるべく、教師の言葉は極力少なくし、生徒の活動量（＝話す量）を増やすように努めた結果、経験を重ねるごとに生徒中心の授業展開ができるようになってきた。



山本永年・市川中学校・高等学校教諭

また、生徒からより多くの発話を引き出すための方法として、生徒に親しみのあるテーマを取り上げたり、グループでの活動内容をクラス全体で共有したりするなど工夫を凝らし、生徒が参加しなくなる授業を目指している。

コミュニケーション主体の授業で度々取り上げられる「文法の扱い方」だが、帰納的なアプローチを重視し、活動中の文法的な誤りは敢えて指摘せず、内容に重点を置く指導を心がけている。多くの場合は、習熟が深まるにつれて誤りは自然と少なくなっていく。そうした文法の誤りについては、教師の追跡的な観察力が必要だと考える。最後に、「よい授業を作るには同僚など仲間の存在が重要である」というメッセージとともに報告を終えようと思う。

山本教諭の授業実践には、「自己関連性 (personalization)」「自然教材(authentic materials)の活用」「教科書の適応(adapting textbooks)」など、英語教育推進リーダー研修の内容が随所に盛り込まれており、秀逸な実践内容であった。参加者にとっても、学びの多い報告であったことだろう。

実践発表Ⅱ【桑野健太郎氏】

続いて、桑野健太郎・九州国際大学附属高等学校教諭から「実践(組織改革)とその成果～横のつながりを作るヒント～」の発表が行われた。

一番訴えたいことは、時代の変化に対応しようとしている先生がどうしたら損をしないか、である。新たな教授法を身につけ、大学を出て目を輝かせている先生が従来型に染まらないように、そのヒントをお伝えしたい。



桑野健太郎・九州国際大学附属高等学校教諭

まず、勤務校でどのくらい組織的に授業を進めているかについてであるが、英検取得者数は2015年改革導入前と2017年組織改革後で、2015年難関コース2級取得者が18.5%から2017年は77%、特進は2.9%から17.9%と大きな伸びを示し、進学コースも準2級は6%から14.7%と伸びた。進研模試の結果も伸びを示している事から、新しい形式の授業で従来の英語力は下がらないことが分かる。

また7～3月における生徒へのCAN-DOリスト形式のアンケートでは、3回の調査の結果で、難関、特進、進学それぞれのクラスにおいておおよそ右肩上がり英語の力が発展していることを示しているが、一部右肩下がりの結果になっているものもある。

次に、この成果をどのように導いたかについては、組織改革がポイントだ。公立教員向けの研修である「ミドルアップダウン・マネジメント研修」に参加し、1年間研修を受けてはレポートをまとめることを繰り返した。研修時の資料「学校のチーム化を目指すミドルリーダー 学校経営感覚に基づく20の行動様式」では、指示していくリーダー的機能だけでなく、待つ必要があるときは待つといった行動指針も示された。

では、実際に私がどう行動していったかについて紹介する。まず1年目は英語教育推進リーダー研修に参加し、自身の指導方法を確立した。確立した指導方法を授業で実践し、どのように効果があるか検証した上で、横のつながりを持つために研修実習を校内外で実施した。2年目は、担当者がすべきことをまとめた資料を作成した。現場の負担感を減らすために、専任、常勤講師の教科会の資料は自分で印刷した。「印刷しておきましたから」と持って行くと、「印刷してもらったものは使用しなければ」という気持ちになる。また、成果をアピールし、やる気につながるようにした。先ほど述べた主観的、客観的成長が様々な形で見える仕掛けをし、保護者、管理職に間接的にも情報が伝わるようにした。3年目は、情報がシステムチックに伝わるように、文書を整理して配布することを心がけた。指導内容を学年に任せるシステムとし、その取りまとめ役を学年のチーフとした。1年間の目標を最初に設定して伝える。指導案作成の順序も最初に決め、工夫をする。コミュニケーションアプローチに詳しい先生、比較的余裕をもってタスク作りができる先生をはじめに配置することで、続く先生がどのようにタスクを作るかが分かるようになった。生徒、保護者には、丸暗記の知識だけではいけないと理解してもらえるよう、思考力をどうつけるかを可視化しよう心掛けた。ある程度の専門用語も紹介し、生徒・保護者へのこうした提示は指導者にも影響を与えた。

最後に、結果が出て現場の先生はどう感じているかについて話そうと思う。「自分だけでは展開できないような授業ができ、とても参考になった」「先生方のご指導及び毎回の授業が私にとって学びの宝庫でした」という感想があり、組織改革がもたらした



た成果を表していると言える。(また現在は新テスト対応の研究を深める一方、自身の研究者としての学習にも注力している。福岡英語向上プロジェクトというタイトルで勉強会を行っているが、生徒に大事なものは学力ではなく学習力であるということを改めて感じている。

桑野教諭の「ミドルリーダー」としての観点から行われた発表は、各学校および教科内で中堅を担う立場の参加者を大いに励まし、且つ示唆に富むものとなった。

実践発表Ⅲ【原田貴之氏】

最後の実践発表は、原田貴之・愛知中学・高等学校教諭より「アウトプット技能の指導と評価の一体化に向けた取り組み」というテーマで行われた。

発表では、同校におけるライティング指導の実践と評価について報告があった。



原田貴之・愛知中学・高等学校教諭

英語表現Ⅱでは、週に一度のエッセイライティング活動を行っている。与えられたテーマに対して、グループワークなどを行いながら下書きをし、初稿の完成後に生徒間によるフィードバック活動を行う。そして、完成した原稿はクラス全体で共有している。注目すべき点は、ライティング活動におけるグループ活動の導入だ。活動を通して生徒同士が互いに学び合う環境が作り出され、こうした交流型の活動を取り入れることで、ライティングのスキル向上だけでなく、客観的で批判的な思考能力も育成することができる。生徒は毎回 100～150 語の分量を書き、1 年間で 20 本の

エッセイを書く。その結果、1 年後には生徒のライティングスピードは着実に向上している。

また、定期テストにおいても新しい取り組みを導入した。従来の和文英訳などの問題を無くし、記述問題はエッセイライティングに絞って出題。同時に、採点業務の効率化を図るため、その他の試験内容はマークシートによる処理をした。

しかし、定期テストへのライティング導入後に一つの問題が発生した。クラス間での平均点の格差である。調査の結果、同じ採点基準を用いても、教員間で評価に若干の誤差が生じることが分かった。採点者間の信頼性(inter-rater reliability)が重要だ。この問題を解決するための、教員を対象とした採点トレーニングについて紹介する。これは、サンプルのエッセイに対して、各教員が採点基準に従って評価し、その結果を照らし合わせることで正しい評価へと導く取り組みである。仮に採点結果が他の教員と大きく異なった場合でも、その教員に対して、「間違っていますよ」と指摘するのではなく、採点者全員の結果を共有することで、気づきを促す工夫が必要である。この実践は、検定試験や外部模試などの成果にも表れている。最後に、実際のサンプルを使って、参加者による採点トレーニングを行いたい。採点者によってどのように差が生ずるのか。ルーブリックの評価シートを参考にして、グループに分かれて2つのサンプルエッセイを評価して頂きたい。(このアクティビティで発表終了)

原田教諭の英語教授法に関する専門的知見が大いに盛り込まれた内容であり、参加者は、実践だけでなく、その背景にある理論についても学ぶ機会に恵まれた。

閉会式

閉会式では山崎吉朗・当研究所主任研究員が、発表者および参加者に感謝を述べ、以下のように



山崎吉朗・主任研究員

挨拶し研修会を締めくくった。「この特別研修会には4年間で延べ680人が参加した。全国の私学の英語教員は約8500人なので、およそ8%だ。当初は公立の教員のみ対象だった英語教育推進リーダー中央研修だが、2年目から私学も参加できるようになり、その受講者が今日の実践発表を下された。参加人数は全体の10人に1人に満たないが、カスケードという意識を持って他の先生方に研修会の内容を伝えてほしい。そうすれば私学全体の大きな力になるだろう。今回は上智大学での開催時としては初の試みとして市川中学校・高等学校での視察を含む2日の研修を行った。多忙な中、視察を受け入れて頂いたことに重ねて感謝を述べたい。

また今回は英語教育推進リーダー中央研修受講者によるワークショップではなく、実践発表を行った。これまでの研修会の参加者アンケートにおいて、中央研修受講生の先生方が学んだことをどう学校で実践しているのか、学校は変わったのかという質問が多かった。今回は実践発表で具体的に説明して頂いた。大変参考になったと思う。今回の研修は、視察、講演、実践発表が1本につながったものになったと感じる。研修会で学んだことを自分の学校でどう活用できるのか、是非考えて頂けると幸いである。」

◆都道府県別参加申込者数◆ (計 24 都道府県)

No.	都道府県名	参加申込数	No.	都道府県名	参加申込数	No.	都道府県名	参加申込数
1	北海道	5	17	石川	0	33	岡山	0
2	青森	1	18	福井	1	34	広島	2
3	岩手	0	19	山梨	0	35	山口	0
4	宮城	5	20	長野	0	36	徳島	0
5	秋田	0	21	岐阜	1	37	香川	0
6	山形	1	22	静岡	3	38	愛媛	0
7	福島	0	23	愛知	4	39	高知	1
8	新潟	1	24	三重	1	40	福岡	4
9	茨城	4	25	滋賀	0	41	佐賀	0
10	栃木	3	26	京都	1	42	長崎	0
11	群馬	0	27	大阪	3	43	熊本	0
12	埼玉	0	28	兵庫	1	44	大分	0
13	千葉	4	29	奈良	0	45	宮崎	0
14	神奈川	3	30	和歌山	0	46	鹿児島	0
15	東京	13	31	鳥取	0	47	沖縄	1
16	富山	2	32	島根	2			
							計	67

アンケート結果 *回収率約 90% (60名/67名)

●当研修会への参加目的をお書き下さい。

- ・他校の取り組みや、色々な情報を通してさらなる英語授業の指導法を知りたいと思ったため。
- ・各英語教育推進リーダーの実践を聞き、自らの実践の参考にしたかった。
- ・入試改革とその影響、新指導要領下での英語教育を知りたかった。

●当研修会の各プログラム・内容等について、参考になった点、感想、意見等をお書き下さい。

<5月11日(金)市川中学校・高等学校>

○研究授業

- ・本校でもタブレットの導入を検討しており、スカイプ英語の授業の様子を見ることができ参考になった。生徒もレベルにかかわらず英語を使おうという姿勢が素晴らしい。
- ・文法の授業で班ごとに意見や答えを出させる授業は取り入れてみたい。様々な ICT 技術を使った授業も参考になった。
- ・生徒同士の活動量が多く、生き生きと授業に参加している姿が印象的だった。
- ・直接的に知識を与えるより、生徒が自ら調べてきた知識の活用を促す授業で刺激を受けた。
- ・様々なクラスを見られたので、学校全体の取り組みが理解できた。

○施設見学

- ・学校全体が広々としており、また ICT 機器も充実していて、生徒にとって過ごしやすい環境だと思った。生徒の興味関心を引く仕掛けが校内の至る所にあり、参考になった。
- ・第三教育センターや市川アカデメイア等、市川学園の挑戦を多角的に見せていただき、参考になった。

○実践報告【山本永年氏】

- ・学習環境が最新だけでなく、背景にはそれを支えるしっかりとした理念があることが分かった。
- ・市川学園の教育、特にアクティブラーニングと国際教育のことがとてもよくわかった。

○質疑応答・意見交換会

- ・意見交換会を通して、各校が同じような課題を抱えていることが分かり、解決策を一緒に考えることができた。
- ・意見交換会はもっと多くの先生方と情報交換の場にしてほしいと感じた。例えば懇親会を設定する、グループワークを行う等。

<5月12日(土)上智大学四谷キャンパス>

○講演【吉田研作氏】

- ・今の英語教育の状況や今後の展開が示されていて非常にわかりやすかった。なぜ改訂が必要なのかということも理解できた。今回の講演で学んだことを本校の先生方へ伝え様々なことに取り組んでいきたい。
- ・新学習指導要領から授業作りを考えるという新たな視点を得ました。つながりを意識した教育を目指したいと思う。

○講演【藤田保氏】

- ・テストの評価方法についてグループで実践ができたので良い経験になった。パフォーマンステストの評価は多くの教員が心配しているところなので学ぶことができてよかった。
- ・今までの形式にとらわれる指導から、手段として英語を身につけさせる指導、「英語を用いて何かを達成させる」ということを念頭に置いた指導をしていかなければならないと感じた。

○実践発表Ⅰ【山本永年氏】

- ・先生だけが英語を話す一方的な授業ではなく、生徒が主体的に英語を話していけるような指導方法が大変参考になった。
- ・どのような実践をされて現在に至るのかビデオを交えて説明して下さり参考になった。

○実践発表Ⅱ【桑野健太郎氏】

- ・組織をどう変えていったか具体例を示していただき、大変参考になった。
- ・共通の教科指導案を作成するのは負担軽減になるだけでなく、互いに学び合えるので良いと思った。

○実践発表Ⅲ【原田貴之氏】

- ・パフォーマンステストの評価に関しては以前より課題であると感じていたため、実際に運用していく際のヒントを頂いた。
- ・評価について、作文の指導について、本校英語科に伝播していきたいと思う。

●本年度秋以降の当研修会への要望等をお書き下さい。（例：研修会で取り上げてほしいテーマ、課題、実施してほしいプログラム、継続もしくは改善を望む事項、来年度以降の開催時期等）併せて、当研究所の研修事業等に対するご意見がありましたらお書き下さい。

- ・今回のように1日研究授業、1日講演だと頭に残りやすく、学んだことを自分の学校で実践するイメージまでしやすかった。
- ・2日間という短い時間だったため、懇親会や昼食会等もあればと感じた。本当に有意義な研修会だった。